

大人が絵本を 第33回 絵本と



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

絵本と図鑑のおはなし会

春のうらかな日曜日に開催したおはなし会で、子どもたちとこんなやり取りがありました。

「こんにちは はるですよ。うみべでは、ちいさいきものたちが うごきました。」

『四季のえほんはるですよ』より



柴田晋吾 作
広野多珂子 絵
(金の星社)



「この中に、みんなが知っている生き物いる？」

「カニ！」「ヤドカリ！」「魚！」

「カニはみんな知っているね」

「捕まえたことあるよ～」

「それじゃあ、絵本のこのカニの名前を図鑑で調べてみようか？」

「うん！」

「ここに『水の生物』という図鑑があります。カニのページを開くよ。」

(トゲアシガニに注目して)「うわ～！それなんだ!!」

「怪獣みたいなカニがいるね。カニってこんなにいろんな種類があるんだね。絵本の中の、こっちとこっちのカニも色や形が違うね。こっちのカニは何という名前だろう？」

(絵本の絵と、図鑑の写真を見比べて)「これ～！」
「見つけたね。絵のように手が赤いカニは、これだね。手とハサミのことを『はさみあし』って言うんだって。このカニの名前は『アカテガニ』。はさみあしが赤いから『アカテガニ』なんだね」

これは、4歳～6歳を対象とした「絵本と図鑑のおはなし会」のひとつの場面です。通常、公共図書館や公民館などで行われている「おはなし会」とは、一定の時間を設けてストーリーテリングや絵本の読み語りを行う、図書館の児童サービスの中で中心的な位置を占める活動です¹⁾²⁾。ビブリオキッズ&ベイビーでも、赤ちゃんおはなし会と2歳～4歳向け、小学生向けで「絵本のおはなし会」を行っています。4歳～6歳向けも当初は絵本だけでしたが、開館4年目の節目に、「絵本と図鑑のおはなし会」に切り替えました。当館が、「絵本と図鑑の親子ライブラリー」だからということもあります。それ以上に、「どうして?」「どうなっているの?」「それから?」が増える年齢の子どもたちと、自分の好きなテーマの図鑑を眺める男の子の多い年齢の子どもたちに、図鑑の楽しみ方を広げ、一緒に探検したり発見したりしてワクワク感を共有しながら、そうすることで、私たちが図鑑の活用方法の新境地を開拓する手掛かりになるのではないかと考えたからです。

不思議・びっくり! 発見の広場

絵本と図鑑のおはなし会のキャッチフレーズは、「不思議・びっくり! 発見の広場」です。絵本の世界を探検し、そこで感じた「これなあに?」「それなんで?」「もっと知りたい!」などを図鑑で発見し、不思議を解決する、驚きいっぱいの広場なのです。

初回の「たんぼぼのひみつ」は、親子1組の参加でした。たんぼぼは花卉がたくさんあるように見えるけれど、「本当は小さな花がたくさん集まったもの」なのだと言見をして、花が何枚あるか実際に数えたり、「綿毛はどうして遠くまでよく飛ぶの?」を図鑑で解決した後には、綿毛を遠くまで飛ばしてみた

手にするときは！

図鑑をかけめぐる

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

り、また、1週間前から水に浸しておいた根の部分から出た新たな芽の成長を観察したり、たんぼぼ風車や腕時計を作ったりして存分に楽しみました。参加者第1号のKくんは、子ども一人っきりで恥ずかしそうにしていますが、発見したことや驚いたこと、知っていることをお母様の耳元で囁いていました。開催日の一週間前に採取して予め瓶詰め準備しておいた実験で、綿毛になったたんぼぼをお土産に渡すと、それはそれは大事そうに抱えて帰って行きました。

おはなし会の翌週末には、「綿毛を水に浸していたら芽が出たよ」と、意気揚々と実験の続きを持って見せに来てくれたのです。同時に、水に浸して2週間経ったたんぼぼの根の発芽が伸びているのを見て、「すごーい！」といろいろな角度から観察してくれました。そうやって、新たな発見と感動をするたびに、Kくんの眼は輝きを放ちますし、恥ずかしがっていたのも嘘のように観察や発見を話してくれるようになりました。

この第1回の満足度は、プログラムを立案し、試験的実験を重ねて開催に至ったスタッフにとっても忘れられないものとなりました。大切なのは参加人数なのではなく、参加してくれる目の前の子どもたちが持ち合わせる好奇心を刺激し、たくさんの発見につなげ、感動や満足感を共有することなのだと考えています。

くらべて遊ぼう

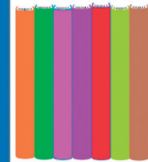
たんぼぼの不思議で驚き、発見した翌月の「不思議・びっくり！発見の広場」は、「くらべて遊ぼう」です。絵本『いろいろペンギン』（光村教育図書）と『およぐ』（なかのひろたか作）を読んで、ペンギンと

人間の泳ぎ方を観察し、『小学館の図鑑NEO原寸大 すいぞく館』でイルカとカジキの泳ぎ方を確かめます。それから、「これらの生きものたちがプールで泳ぎの競争をしたら、誰が一番になるかな？」とクイズを出すと、子どもたちの思考はグルグルと回転を始めます。前回の「ことば遊びの魅力」で「子どもたちはなぜなぜが大好き」と言いましたが、なぜなぜと同じくらい、クイズも大好きなのです。「なぜなぜとクイズの大きな違いは、答え方にある」と金田一秀穂氏は説いています。なぜなぜは、とんちをきかせた答えが求められるから、答えは本当でなくても構わないのですが、クイズは、事実に基づいて正しく答えなければならないのです³⁾。図鑑を使ったクイズは、子どもたちの知的好奇心をくすぐりますし、答えがビジュアルで視覚に入ってきて、それに解説が伴うので、思考力も刺激しながら正しい理解を得ることもなります。

泳ぎの競争をする選手(生きもの)たちの写真や絵を、図鑑や絵本を使ってズラリ並べると、子どもたちのワクワク感は高揚し、みんなが図鑑に近寄ってきます。「ペンギン?」「人間は負けるよ」などの意見・感想が飛び交う中、「それでは、位置について、よーい、スタート!」に合わせて、泳ぎくらべのページをパッと開くと、一目瞭然、子どもたちは「バシヨ

『小学館図鑑NEO
原寸大すいぞく館』
さかなクン 作
松沢陽士 写真
(小学館)





ウカジキ！」と一斉に叫んで回答してくれました。

『くらべる図鑑』、くらべて図鑑！

この回のメイン図鑑は、本連載17回でも紹介しました、2010年に到来した図鑑ブームの火付け役となった小学館の『くらべる図鑑』です。それまで分類基準の主流であった「昆虫」「植物」などの種類別編集を一変し、乗り物と生き物の比較といった、種別の境界を越えた新しいタイプの「テーマ図鑑」が登場したのです。好奇心旺盛で、何にでも興味を持ち、答えてやろう、当ててみたいという欲求の高い子どもたちには、恰好の遊びものです。人間や動物たちのかけっこ競争の次は、動物との乗り物の競争です。「さっき一番になったチーターはどうか？」「チーターよりも新幹線が速いよ〜」「新幹線！」などとみんなで会話をしてから答え合わせです。



『小学館図鑑 NEO ぷらす
くらべる図鑑』



たくさん、くらべて遊んだ最後の絵本は、福音館書店の『このよでいちばんはやいのは』。今日、確認してきたチーターもジェット旅客機も速いけれど、それらよりもっと速いものがある、それは私たち人間が持っているものなんだと確認すると、お母様方が「うんうん」とうなずいておられました。

絵本と図鑑のおはなし会参加第1号になってくれたKくんは、この回も参加してくれて、おはなし会が終わるとビブリオキッズで、「昆虫」や「動物」「人間」など種類の異なる図鑑10冊以上を一斉に、机上に並べて、お母様と2人で正に「くらべる図鑑」実地体験です。それまでは歯科受診日の健診前後で来館することの多かったKくんでしたが、「たんぼぼ」の会以降、週末の来館が増え、来館の度にさまざまな

図鑑を親子で楽しむ姿がよくみられるようになりました。

少しのきっかけで子どもたちの知的好奇心はどこまでも高まり、「もっと知りたい」欲求が積極的な行動に現れることを、この「絵本と図鑑のおはなし会」を通して痛感しています。

子どもの知的好奇心を刺激する

お母様お父様から受ける絵本相談には、「読んで聞いてくれない」「ことばを覚える絵本は？」「同じ絵本を延々と“読んで”と言われて疲れる」等等、各家庭の生活背景や子育て事情に密着したお悩みが多種多様に聞かれます。ですから、同じ質問でも、質問者が異なれば、お答えの内容も変わってきます。それぞれの家庭環境をレファレンス・インタビューして、お子様がなぜそのような行動をとるのか、親御さんはどんな関わり方をしているか、期待度などをキャッチすると、当然、支援レベルも異なってくるのです。

では図鑑相談の内容はどうでしょう。質問の8割方は「図鑑を買いそろえていきたいけれど、どの出版社がおすすめですか」というものです。確かに同一シリーズの図鑑が家庭の書棚に並んでいたら、景観きれいですし、品格もあります。図鑑は子どもたちの知的好奇心をくすぐり、思考力や記憶力を高め、そして、「もっと知りたい、調べたい」という知的欲求をも高めるものです。そうであるならば、ひとつの出版社に決め込んで、そのシリーズを単一に買い足していくのではなく、一冊一冊、ひとテーマひとテーマ、多数ある出版社別の図鑑を読み比べて、子どもの興味を満たしてくれる写真や解説が掲載されているのはどれか、探索しやすい編纂はどれか、関連付けた情報に導いてくれるのはどれかなどを親御さんの目線で押し測って購入決定されてしかるものなのです。図鑑相談に対する回答のベースはこのように定型的なお話をしています。

教育評論家の親野智可等氏は「生活や環境の中で楽しみながら自然に知性が鍛えられる環境があるか」が子どもの知的好奇心の刺激に欠かせない要素と述べ、「知ることの楽しさを知って自ら意欲的にいろいろなことを調べるようになる」と助言しています⁴⁾。「勉強しなさい」とか、「自分で勉強ができるように図鑑を買ったよ」などと言われるより、「勉強」という文言なくして、「今日拾ってきた葉っぱは何という名前だろうか?」と、自然なスタイルで親子が一緒になって、調べることが大切なのです。

たんけん! はっけん! 本物体験!

4月開催の「春をたんけん!」では、絵本『ムーミンのふしぎ』(講談社)の中で、ムーミンが感じた「海は青いのに、手ですくっても青くないのはどうしてなんだろう?」を図鑑で探します。子どもたちより、「塩が入っているから」と、科学的な見地にも捉えられる答えが出たところで、正しい答えを探しに図鑑探検が始まります。海の色不思議は、太陽に秘密があることを『なぜ?ど~して?図鑑』(永岡書店)で解決して、お家でできる実験方法を伝え、「やってみる~」とか、「お風呂が青いからできな~い」など、「実験したい」と思考している返答がどんどん寄せられました。

次には、「茶色い桜の樹の皮で布を煮染めると、ピンク色になるのはなぜ?」をムーミンと一緒に探索です。実際に桜染めしたスカーフや、煮染め中の鍋の中身、それから桜の樹の実物を見てそれぞれの色を確認しながら、『草木染めの絵本』(農山漁村文化協会)、『草木染め染料植物図鑑』(美術出版社)などを開いて色の不思議を探究です。花の色は花だけに付いているのではなく、実は樹皮と木部の間にある内皮に最も色素が多く含まれていることを、幹の断面図を見ながら確認すると、お母様方から「へえ~」と感嘆の声が漏れてきました。

親野氏は「本物に触れる『本物体験』が最もインパ

クトが強い」として、「その体験が子どもの心に非常に大きな印象を残す」と論じています⁴⁾。そのうえで、現代の図鑑が「生きものの生態や動きのある写真もたくさん載っている」特徴に触れ、本物体験のインパクトには及ばないながらも、いろいろな世界を疑似体験できるため、「プチ本物体験」と名付けています⁴⁾。限界のある本物体験を補うのが図鑑で、私たちの「絵本と図鑑のおはなし会」では、「プチ本物体験」の図鑑を豊富に活用するとともに、「たんぽぽのひみつ」や「ムーミンのふしぎ」のように実物も用意して、子どもたちの心に大きなインパクトを残す構成にしています。

参加親子1組からスタートした「絵本と図鑑のおはなし会」でしたが、口コミとSNSでの発信などによって評判は広まり、第3回には子ども14名、大人8名が参加し、開始から1年も経たないうちに、人気のイベントとなりました。毎回参加してくれる3姉妹のお母様は、「このおはなし会に参加して、子どもの成長が目に見えるので嬉しいです。こんなことが出来るようになっているとか、そんなこと覚えてんだあなど、子どもの成長の発見の場になっています」と、ある日のおはなし会終わりに感想を述べられました。

私たち「医療法人元気が湧く」が目指す地域における育児支援の一部です。



文献

- 1) 日本図書館学会: 図書館情報学用語集, 丸善, 東京, 1997, p.17.
- 2) 安藤宣子, 濱野良彦: 待合室での「絵本のおはなし会」(大人が絵本を読むときは! 第12回), 小児歯科臨床, 20(10), pp.52-55, 2015.
- 3) 金田一秀穂 監修: 日本語力をきたえることばあそび②, フレーベル館, 東京, 2011, pp.20-23.
- 4) 親野智可等: 頭がいい子の図鑑の読み方・使い方, あさ出版, 2013, pp.14-55.